

オリーブ産業で栄える町 —後期青銅器時代～初期鉄器時代—

調査区ではこれまでに7基のオリーブ油を採取するための施設がみつまっている。C地区で1基、D地区で3基、E地区で2基、F地区で1基である。E地区では1基が隅丸方形だが、C・D地区は全て平面が円形である。遺構の年代はE地区のものは不明だが、他は後期青銅器時代から初期鉄器時代のものである。F地区の1基は長方形の石を削りぬいたものでペルシャ時代に降るとみられる。

C・D・E地区の施設は石を組み合わせたもので直径1.3～2.1mあり、上部がやや開く。底面は平らだが1方向に傾斜しており、最も低い部分には直径25～30cmの石製ボウルが設置されている。砕いたオリーブをボウルに集め、それを絞りオリーブ油を採取すると考えられている。このようなオリーブを砕く施設はイスラエル国内でも沢山みつまっているが、テル・レヘシュ遺跡は広い面積を発掘調査しているわけではないにもかかわらず、これまでに7基もみつまっているのは、この遺跡がオリーブ油を生産する拠点であった可能性が高いと考えられる（山内）。



D地区の大型建物（後期青銅器時代～鉄器時代I期）

C地区とD地区では、後期青銅器時代Ⅲ期（紀元前12世紀）から鉄器時代I期（紀元前1130-980年頃）への明確な連続性が確認されている。D地区では紀元前12世紀末に破壊され焼失した長方形の建造物（13m×8m）が検出され、その中央から円型のオリーブ搾油設備1基がほぼ完全な形で発見された。同一建造物の別の地点にも同様のオリーブ搾油設備が確認されている。また、その西側の部屋の床面からは後期青銅器時代後半の土器が出土しており、この地区の建造物自体は後期青銅器時代に建造され、鉄器時代I期に改装されて使用されたものとみられる（小野塚）。



石組円形のオリーブ搾油設備と立石群（C地区）



オリーブ搾油設備（E地区）



石組円形のオリーブ搾油設備（D地区）



炭化したオリーブ種実（C地区）



オリーブ採油容器（D地区）

テル・レヘシュ遺跡では、発掘された面積はわずかであるが、驚くべきことに、すでに7基の搾油設備が検出されている。これらの遺構はオリーブ油をより大量に生産しようとする設備であったことは明確であり、後期青銅器時代末期～鉄器時代I B期にオリーブ油生産が活発化したことを物語る。他にも、エジプトの拠点都市であったベト・シャンや、メギド、ゲゼル、ベト・シメシュといった有力都市で、複数の搾油設備が発掘されている。パレスチナでは新石器時代末期以来、家庭的なオリーブ油生産しか行われてこなかった、いわば「オリーブ油生産の後進地域」であった。それが、後期青銅器時代末期になると、おそらく有力都市やエジプトの王室が管理する搾油施設が建設されるようになり、オリーブ油生産が次第に産業化していったと考えられる。パレスチナでこれまでに出土した搾油設備を整理すると、こうしたオリーブ油の新しい生産体制は、紀元前12世紀以降に広まりを見せている。この時期には、ミケーネやウガリトが終焉を迎え、東地中海世界の混乱とともに、エーゲ海や北シリアといった「オリーブ油生産の先進地域」からのオリーブ油（製品）の供給が激減したと考えられる。これが契機となり、「後進地域」であったパレスチナやエジプトでもオリーブ油生産の活発化が促されたのだろう。その後パレスチナは、紀元前7世紀後半にオリーブ油の一大生産地となり、エクロンの町がオリーブ油産業で繁栄したことが知られている（小野塚）。